さいたまここに人あり

被爆者運動ひとすじの人生を振り返って

日本原水爆被害者団体協議会
代表委員
田中 熙巳さん

プロフィール　1932年、陸軍将校だった父恒男さんの赴任先の中国東北部の奉天で生まれ、今年92歳となる。13歳の時、長崎で被爆。1970年前後から宮城県の被爆者団体に参加し、1985年には日本原水爆被害者団体協議会（被団協）事務局長。現在は日本被団協代表委員、新座市在住。

重傷者であふれていた小学校講堂

1945年の4月、私は中学1年生（旧制長崎中学）の13歳でした。4月に入学したんですが、このときアメリカ軍は沖縄に上陸し、沖縄戦がはじまった頃です。この頃は授業のない学校生活でした。1年生は外で2日作業して、1日授業。授業の日に警報が鳴るともう授業はやらないことになっていました。だから、ほとんど授業は受けていないんです。3年生以上は朝から工場に出勤し、終日兵器の部品つくりをしていました。

8月9日は朝8時頃に空襲警報が鳴りました。空襲警報が解除になると警戒警報状態になるんです。それが9時くらいだったでしょうか。午前11時2分というのは、普通は警戒警報も解除になる時間です。そのときに爆発があったのです。

私の家は爆心地から3キロ少しのところにありました。爆発はすさまじいものでした。2階で本を読んでいたんですが、突然ガーっとものすごい音がして、パーと光ったんです。周囲はもう本当に真っ

白です。なにごとが起こったのかとびっくり仰天して、走って1階まで階段を降りたところで目と耳をふさいで伏せました。その直後に爆風が来たんです。　私は、気を失っていたんですが、母親が私の名前を一生懸命呼んでいるのが聞こえてきて、気が付きました。私の体の上に2枚の大きなガラス戸が割れないでかぶさっていました。割れてなかったというのは奇跡だと思います。

家には母親と小学生の妹が2人いたんですが、3人とも光った瞬間に廊下から庭に飛び降り、庭は爆風の反対側だったので、そこにしゃがんだと思います。妹はケガをしてなかったようです。

その後しばらくして、たまたま上級生と会い、火災の状態を見に行こうということになって、県庁の方へ行きました。帰る途中、私が卒業した小学校があり、講堂が救護所になっていました。爆発から2時間くらいたっていましたが、もう講堂の中は重傷者でいっぱいです。救護している人は近所のおばさんたちで、医者も看護の方もいません。ひどい火傷の人がいっぱい収容されていました。30分くらいその場にいたと思いますが、見ている間に亡くなる人がいるんです。亡くなった人はすぐに校庭へ運ばれました。それを見て、やっぱりすごい爆弾だったんだなと思いました。

父親の姉と母親の姉が爆心地近くに住んでいて、2人は残念ながら亡くなりましたが、安否を確認をするのに3日目に爆心地帯に入り、日が暮れる前まで何時間も一面焼け跡を歩いて回りました。おじは放射線だけで、ケガはしてなかったのですが、その後亡くなります。亡くなった母方のおばの遺体を焼くのに立ち会うことになりました。それがいちばん悲しかったですね。無意識になって、感覚がひどい状況になって、とても正気では歩けなくなりました。遺体は人間なのですが、物のようにしか見えなくなってしまうんです。結局5人の家族が亡くなりました。

1970年代から被爆者運動へ

連合国軍総司令部（GHQ）による占領が終わる1952年までの7年間は、原爆のことは一切話してはいけなかったんです。GHQによって厳しく緘口令がしかれていました。だから被爆者が声をあげたり、集まることはできませんでした。サンフランシスコ条約発効の後、最初のマスコミ報道は『アサヒグラフ』（1952年8月6日号）で、はじめて被爆の写真が公開されました。しかし、むしろ放射線の被害や、「生まれた子どもにも影響するのでは」など、被爆者への偏見が広がりました。

1954年にビキニ環礁で第五福竜丸事件があります。そのとき、私は東京に出てきていて、東大の生協で働いていました。乗組員の久保山愛吉さんが亡くなり、生協の職員でご遺族に寄せ書きを送っています。

私はこの頃、生協の労働組合の役員になって労働運動をはじめていたので、私は「被爆者ですか」と聞かれても「そうかもしれませんね」程度の言い方をしていたと思います。しかし、このビキニ事件は被爆者が声をあげていく出発点になったのです。

1956に東京理科大学に入学し、28歳で卒業しました。大学にあった東北大学工学部の研究助手募集の張り紙を見て応募したら採用されました。このときは

ちょうど１９６０年の安保闘争のときで、勉強はおろそかにして安保反対の運動をしましたね。

１９７０年代に入って宮城県の被爆者の事務局を手伝うことになりました。大学の研究助手をやりながら事務所に通っていました。事務所は仙台の宮城県原水協の事務所を間借りていました。

その後、被爆者運動は国際的な運動にも広がっていきますが、１９７６年に核兵器廃絶を国連に要請する国民代表団の被爆者代表のひとりとして、はじめて国連を訪問しました。

80年代に入り、仙台の東北大学に勤めたまま、１９８５年には東京の日本被団協の事務局長になってくれと頼まれ、大学で研究をしながら事務局長の仕事をしたのです。大変な忙しさで、両方の仕事の板挟みになってしまい、自律神経失調症と医者に診断され、「すぐやめなさい」と言われました。

90年代、１９９６年東北大学を定年退職して63歳から新座市に引っ越して、日本被団協の仕事をしながら、十文字学園に勤めはじめました。そうしたらまた事務局長をやってくれと言われ、２０００年に引き受けることになりました。

日本政府は真っ先に署名すべき

１９７０年に発効していた核兵器不拡散条約（ＮＰＴ）は5年ごとに、再検討会議といって、核保有国がどのくらい核兵器を削減しているかを検証する会議があります。２００５年からそこに被爆者が出席し発言できるような条件をつくりました。また、会議の期間中、日本被団協が中心になって「核兵器の被害に関するパネル展示」をおこなうことができるようになりました。

その後２０１０年頃から、国連からは核兵器を無くす法的なしくみを考えなくてはだめだという意見が出てきました。２０１５年の再検討会議のときには、もう「条約」をつくらないといけないという大勢になったと私は思いました。翌２０１６年には、核兵器禁止条約をつくるために動いていた国が「条約をつくれ」と具体的に動き出し、私たち被爆者は国際署名をすすめようと訴え、世界中に呼びかけました。そして、２０１７年には条約を成立させる会議になるのです。

条約が成立して以降、少しずつ批准する国は増えています。２０２１年1月に発効し、締約国会議も開催されるようになり、確実に前進していると思っています。子どもたちにも、核兵器禁止条約が成立したことを評価し、伝えることが大事だと思います。しかし、核保有国やＮＡＴＯ諸国や日本のようなその同盟国は、「核抑止力」が弱まると言って署名も批准もしていないのは残念です。核兵器禁止条約の締約国会議では、たとえばアメリカの核の傘の下にあるドイツなどは条約に参加していませんが、オブザーバーとして会議には参加して自分たちの意見を言い、議論します。そこで、被爆者は被爆者の立場で発言しますから、議論の中で変化も出てくると思います。

日本政府は唯一の戦争被爆国だと言い、「究極的」としていますがいちばん核兵器の廃止を願っているのであれば、真っ先に署名・批准しなければならないのに、しないのはけしからんと思います。条約に参加しなくても、せめて締約国会議にオブザーバーとして出席すべきです。そして、被爆者の状況を伝え、被爆者の願いを訴えれば、与える影響は大きいと思います。さすが被爆国だといわ

れるくらいのことをしなければ、はずかしいですよ。若者たちを含めて、我々国民が日本政府にそのように迫っていくことが大事な運動だと思います。

原爆をどう教えるか

今は先生方への締め付けが強くて、こんなことを言ったら親からクレームが来るんじゃないか、校長先生から怒られるんじゃないかとか、「危ない」ことは言わないと自己規制しているように思います。先生方がこんな状況に置かれるようになったのは、保守的になった世の中全体のせいだと思います。こうした日本の体制を変えなきゃいけないですね。

ただ、先生のあり方として、子どもにいろんなことを押し付け、教え込むなと言いたいですね。子どもに自分で解決させる、考えさせる条件をつくるのが先生の役目だと思います。生徒といっしょに自由にいろんなことを話し、勉強し、考えてもらいたいことをこちら側から言えば、いろいろとお互いに考えることはできる。そもそも教員というのはそういう仕事だと思っていました。

原爆のことを知ってもらうためには、まずその実態を感性で受け止めてもらいたいですね。頭や理屈じゃなくて、実際の姿を見るのがいちばんなんです。しかし、残念ながら写真はほとんどないですからね。証言活動を始めたころ、口頭で話すしかないのかと思っていたとき、NHKが被爆者や当時の状況を見た人に絵を描かせて、市民がそれを見るということを紹介していました。絵の上手、下手はありますけど、こういう状況だったと描いているんです。私はすごく感動しました。

今はそのような映像や絵はたくさんあります。とくに感受性豊かな子どもにとってはたいへん大事です。広島市立基町高校には、創造表現コースというのがあって、そこの高校生が被爆者の体験を聞きながら描いた作品を展示して「原爆の絵画展」を開催しています。僕らの頃は、ひたすら手記や証言を読んである程度イメージしたんですが、絵とか映像はなかった。原爆の被害について、できるだけリアルに子どもたちに伝えてくださいと先生方にお願いしたいですね。理屈でなくて、言葉でなくて、感性に訴える材料をできるだけ使って子どもたちに感じさせてください。ただ、あまりに生々しいものは、小学校3年生以下などでは逆に教育上よくないというので、そのようなものを展示するの場所では、親といっしょに見るコーナーをつくって、どうしてこのような状態になったかを解説できるような工夫をしてほしいと国連からも要請されています。

基町高校の「原爆の絵画展」